
刀語 × F a t e ~ 現代に集う英雄たち ~

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀語×Fate

↓現代に集う英雄たち↓

【Nコード】

N4219Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

時を遡ること数百年前・・・第1次聖杯戦争・・・
その場に召喚されたサーヴァントたちは、なんの因果か「刀語」において時代に名を刻む英霊たちだった。

まだ戦国の世が終わって間もない時代、に激闘を演じた英雄たちが、
今一度現代に蘇り、聖杯をめぐる・・・

現代版時代活劇・・・フェイト・カタナガタリ

始まり始まり
・
・
・

く英霊召喚く（前書き）

刀語とフェイトのクロスオーバー作品です。

召喚されるサーヴァントが全て刀語関係の人物という。
洒落にならない不自然さ。

正直両作品とも知っている方はそんなにいないと思いますが。
知っている方は、楽しんでください・・・

く英霊召喚く

そこには一人の人間が居た。

暗い、狭い、臭い。

床には謎の文様がある部屋だった。

そんな場所に彼女は一人で立っていた。

そしてその少女の目の前には、朽ちかけの誰かの白髪が置いてあった。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

その場にいた一人の少女は、何かを喋り始めた。

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオ
ーグ」

「振り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至
る三叉路は循環せよ」

「告げる………」

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ・・・」

「誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

「汝三代の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

床の文様が輝き、部屋全体が揺れる。

大気が震え、目の前が光り輝く。

そして少女の目の前に「何か」が現れた。

現れたそれはヒトではない。

ヒトであった、かも知れないが、今はヒトではない。

そんなものが少女の目の前に現れた。

「・・・あれだ、えっと・・・」

現れたそれは少女に向けて喋り始めた。

「あんたが俺のマスターか？」

ゝ英霊召喚ゝ（後書き）

結構ミスマッチなクロス作品ですが・・・

うまく行くように頑張ります。

く甦る虚刀流の男く（前書き）

続きものなので、少しづつキャラを増やそうと思います。

始まり始まりっ？

く甦る虚刀流の男く

「あんたが俺のマスターか？」

それはそう言った。

「ええ、私が貴方のマスターよ」

少女はそれの言うことに応えた。

「それで、貴方のクラスはなに？」

続けざまに少女はそれに質問をした。

「ああ、俺は多分、セイバーだと思うぜ」

表情を変えることなく、淡々とそれは応えた。

「わかったわ」

短くそれだけを言うと、少女は扉の前まで行き、部屋を出た。

「・・・・・・・・」

それは黙って立っていた。

「！」

何かに気づいたように、それは床の一部を見つめていた。

視線の先には朽ちかけの白髪が置いてあった。

ゆつくりと、それは視線の先に近づき、跪いた。

「久しぶり、とがめ」

それは表情を崩し、微笑んでいた。

「なんで貴方が私の名前を知ってるのよ？」

少女は扉の横で、跪くそれを見つめていた。

「ん・・・？あんた、とがめって言うのか？」

「そうよ、咎める女と書いて、とがめと読む」

少女は言い終わると、その目の前に来た。

「真名は？」

「真名？・・・ああ、本当の名前か」

ぬっ、と立ち上がり。

それは静かに、若い声で言った。

「虚刀流七代目当主、鑢七花、だ」

言い終わったその口元に、少女は寂しさを感じた。

「予想通りの名乗りね、まあそのために聖遺物をコレにしたんだものね」

少女は床に置いてあった白髪を、ひょい、っと掴んだ。

「貴方に一番親しい人物の遺物・・・でしょ？」

「・・・まあな」

悲しげな視線で、それは白髪を見つめていた。

先程の微笑みは、今は消えている。

「ちょっと、辛気臭いわよ」

少女はケタケタ、と笑いながら言った。

「とにかく、これからはお互いパートナーなんだし、ヨロシクね」

「ああ」

それが、七花と、咎女の、出会い。

~~~~~

同時刻・・・

「俺は、眠いんだよ」

~~~~~

同時刻・・・

「拙者にときめいてもらへんぢやね」

~~~~~

同時刻・・・

「不名乗、名乗る必要はない」

~~~~~

同時刻・・・

「うちっちは遊びに来たですよ！」

~~~~~

同時刻・・・

「早々で申し訳ありませんが、私は死にたいんです」

~~~~~

同時刻・・・

「ぼくは英雄じゃなくて、仙人なんだけどね」

~~~~~

時を同じくして、七体のサーヴァントが現代にその勇姿を表した。

しかし、その全員が、全員に面識のある人物だとは、誰も知らない。

少なくとも、今はまだ。



ゝ甦る虚刀流の男ゝ（後書き）

刀語を読んでいる方は、誰がでるか分かってしまったかもしれないね。

続きます。

ゝ蘇る居合斬りの浪人ゝ（前書き）

今回登場するは、生前、因幡砂漠に城を構えた浪人。

光速を超える居合斬りの達人。

名を宇練銀閣。

そんなこんなで雑劇寸劇茶番劇。

フェイト／カタナガタリ第3話・・・

始まり始まりっ



## く蘇る居合斬りの浪人く

そこはとある教会。

教会の床には謎の文様が刻まれている。

そこには前者と同じく女性が立っていた。

少女と呼ぶには大人びていて。

大人と呼ぶには幼く感じる。

大学生のような女性。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

その女性も謎の言葉を唱え始める。

簡略。

・・・「天秤の守り手よ！」

女性の目の前は光り輝き、教会から光が漏れる。

突風が吹き、女性の服がたなびいた。

そして、またしても、それは現れた。

今はヒトではないそれが、この女性の前にも現れた。

「・・・・・・・・」

それはどうやら眠っているようだ。

あぐらをかき、刀を肩を支えに抱いている。

黒髪長髪のそれは、眠っている。

「あの・・・・・・・・起きてもらえますか？」

女性はそれに対して、声を発した。

それは目をゆつくりと開けた。

浅い眠りだったようだ。

ふう、と言って首を少し動かしたそれは女性に。

「おまえさんが・・・・俺のマスターって奴か？」

と、言った。

「はい・・・・そうです」

女性はか細い声でそれに返答した。

「分かった・・・・それで、俺に用でも・・・・？」

ふわあ・・・・、とあくびをしながらそれは言った。

「えっと・・・名前を教えてくださいませんか？」

「人に名を聞くなら、自分から、じゃないか？」

それは肩を回しながら言った。

「あつ、すみません・・・私は間桐瞬つて・・・言います」

「ああ、まとう・・・まどか、ね・・・」

手のひらで顔をこすりながらそれは言った。

「じゃあ、あなたの名前も教えてください・・・」

「ああ・・・名前ね・・・名前・・・」

目をこすりながら、それは立ち上がり。

「宇練家十代目当主、宇練銀閣・・・だ・・・」

よろよろと立ちつつ、それは生前の名を名乗った。

「宇練さん・・・ですね」

瞬はその・・・いや宇練という名を確認して、更に尋ねた。

「じゃあ、クラスはなんですか？」

「クラスね・・・アサシン、ってクラスじゃないか？」

銀閣は退屈そうに周りを見回しながら応えた。

「えっ、アサシンですか・・・？」

瞬は少しだけ驚いたようだった。

それは瞬の知っている銀閣が「剣士」だったからだ。

てつきりセイバーのクラスで現れたと思っていた瞬は。

「なんで・・・アサシンなんですか？」

と思わず聞いた。

質問が多いな・・・、と銀閣は頭を少しかいた。

「あれだ・・・暗いところに居座ってたのと、よく暗殺者に・・・狙われたから・・・かな」

納得のいく応答とは言えない応答だったが。

「あっ、そうなんですね、分かりました」

と瞬は納得した。

「眠いんだが、寝ていいか？」

銀閣は腰を下ろして、目を軽くこすった。

「あ、あの！」

瞬は少し大きな声で言った。

「これから、よろしくお願いします！」

そして瞬は手を銀閣に差し伸べた。

しかし。

「・・・・・・・・」

握手を求めた瞬の手は握られず、銀閣はすでに眠りに落ちていた。

「・・・私も、眠くなっちゃったかな・・・」

教会のど真ん中で寝ている銀閣を、瞬は隅まで移動させた。

「おやすみなさい」

そして瞬も教会の椅子に腰を下ろし、置いてあった毛布で体を包んだ。

それが、銀閣と、瞬の、出会い。

「蘇る居合斬りの浪人」(後書き)

はい。

順番的にセイバーの次がアサシンってどうよ？

と友達に言われてしまいました、が。

一応銀閣は2番目の敵なので。

順番は折れてないです。

というわけで、次回は「不」を誇りとする元忍者。

が登場する予定です。

では。

く未練を残した相生の元忍者く（前書き）

今回登場するは、全てを一度失った男。

失われた忍法・拳法・剣法を駆使する。

名を左右田右衛門左衛門。

そんなこんなで奇態失態時代劇。

フエイト／カタナガタリ第4話。

始まり始まりっ

く未練を残した相生の元忍者く

そこはどこぞの屋敷。

和風の作りにして、部屋は全てふすまにて区切られている。

そんな和室の一室に。

またしても女性が立っていた。

いい加減男キャラを出せ、という声は聞こえないふりをするしかない。

そしてその部屋の床にも、謎の文様が同じように刻まれている。

更に、その文様の中心には、「不忍」と書かれた、安っぽいお面が転がっていた。

「準備オーケー」

その女性は青い瞳で目の前の光景を確認し。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

前者と同じ言葉。

簡略。

「天秤の守り手よー!」



ちよつと軽い声で女性が言い終わると。

部屋に風が流れ、少しふすまが揺れた。

そして予想通りそれは現れた。

黒い洋風スーツを纏、顔面に「不忍」と書かれたお面をしている男。

それは現れた瞬間から跪いていた。

「お久しぶりでございます、否定姫様」

それはそう言った。

「否定する」

そして女性はそれを否定した。

「私はお前の言うことを否定する。私は否定姫じゃない」

女性は続けざまに否定を続けた。

「そうでしたか。では、否定姫によく似ている、あなたは一体・・・

」

少し寂しげな表情をして、と言っても表情は確認できないが。

それは女性に問いを投げた。

「私はあなたのマスター。それ以下でもそれ以上でも、はたまたただのマスターでもない」

女性は続けて言った。

「否定姫、つてのは確かに私の祖先だけど、私は否定姫じゃない」

その言うことに分かりやすく、女性は応えた。

「では、マスター。あなたの名前は」

「否定姫」

「は？」

女性の名乗りにも、それは疑問を持った。

「勘違いしないでね、私は否定姫じゃない、だけど私は否定姫と名乗る」

そして、こう続けた。

「あんたが仕えるべきなのは、いつの時代も否定姫だけなのよ」

女性は何かをぼかすように言った。

「感謝します」

それは短く女性に返した。

その類には、なにか水が伝っていたようだが、それは気のせいだろう。

「それで、あなたのクラスは」

艶やかな声でその聞いた。

「アーチャーです」

「ふうん、まあそれもそうよね」

納得したかのように女性は続けた。

「あなたの宝具は。飛び道具なものね」

まるでその全てを知るかのように。

女性は言いのけた。

「で、あなたの名前は、左右田右衛門左衛門、で間違いないわよね」

「はい」

自ら名乗りを上げることすら、それは出来なかった。

「右衛門左衛門、とりあえずはよろしく、と言ってあげる」

女性は区切り区切りで言った。

「こちらこそ、否定姫」

「花丸」

女性は少し微笑んで、それに言った。

「マスターとサーヴァントって関係は正直、面倒くさいのよ」

続けて。

「だから私は一心同体、と表現するわ」

と言った。

「姫様に頂いたこの名にかけて、勝利を約束します」

ふふっ、と笑って女性はふすまに手をかけて言った。

「じゃあ私はもう寝るから、あんたは・・・屋根裏にでも寝なさい」

そう言っで、ふすまをピシャ、としめた。

人間の居なくなった部屋で、それは短く言った。

「はい、否定姫様」

それが、右衛門左衛門と、否定姫の、再開・・・いや出会い。



く未練を残した相生の元忍者く（後書き）

次回は怪力剛力の無双少女。

一族の最後の生き残りにして、虚刀流を破った少女。

が登場。

く天真爛漫な剛力少女く（前書き）

今回登場するは、極寒の冬山で生まれ育ち。

無双の怪力を有し、無邪気で純粋な少女。

名を凍空こなゆき。

そんなこんなで一体全体時代劇。

フェイト／カタナガタリ第5話。

始まり始まりっ

く天真爛漫な剛力少女く

そこは山中。

正確には山中の山小屋。

内部に区切りはなく、大きな一部屋で構成される山小屋だ。

その小屋の床には、恒例の謎の文様が刻まれている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもどおり、同じような言葉が聞こえる。

若い、男の声だ。

やっと男キャラがでてきた事に、感動を覚える。

簡略。

「天秤の守り手よ」

小屋自体はボロい作りだ。

文様から吹き出た風により、入口の扉が外れて吹っ飛んだ。

そして小屋のあらゆる場所から、光が漏れた。

案の定、それは現れた。



全身を白い防寒具のような毛皮で包み。

幼さの中に純粹さを感じる、少女の容姿。

「あなたが、うちっちのマスターですか？」

それは一般に言う「ロリ声」でそう言った。

見た目通りに、幼いようだ。

そして、元からいた男性も。

「うん、僕が君のマスターだよ」

と言った。

男性の方も、身長こそそれより高いが。

年齢に関しては、それと同じくらいだった。

「君の名前は？」

男性、いや、男子はそう聞いた。

「うちっちは凍空こなゆき、って言います！」

それに対して、それは正直に応えた。

「こなゆきちゃんだね」

男子は続けざまに質問をした。

「じゃあ、こなゆきちゃんのクラスは何かな？」

なんだか、子供を誘拐するお兄さんみたいな喋り方である。

しかし、それは、正直に応える。

「はい、うちっちはバーサーカーってクラスだと思います」

男子は目を丸くした。

バーサーカーというのは、簡単に言うと、理性を失う。

そして、その代わりに、ほかのサーヴァントを超越する破壊力を得る。

そういうクラスである。

だが目の前のそれは、きちんと理性を保っている。

さらに言えば、華奢な少女の身体に、他の追隨を許さぬほどの怪力があるようにも見えない。

そついう点から、男子は驚いたのだ。

「こなゆきちゃんにはバーサーカーなのに、なんで理性があるの？」

どストレートに男子は聞いた。

包もうとは全くしない。

「えっと、多分、生きてた頃に一度理性を失ってるから・・・」

それは続けた。

「だから今は理性が戻ってるのかもしれませんが」

どうやら本人も、詳しくは知らないようだ。

「そっか、うん、分かった」

男子はニコツ、と微笑んでそれに近づいた。

「これからよろしくね、こなゆきちゃん」

こなゆきの頭を撫でながら、男子は言った。

「はい。よろしくお願いします！」

こなゆきも元気にそれに返した。

しかし。

「あつ、そういえば、マスターの名前はなんて言っんですか？」

こなゆきも男子に質問を返した。

「僕かい？僕の名前は・・・」

少し間を置いて、男子は言った。

「遠坂桃李、だよ」

「とおさか・・・とうり、さんですね」

こなゆきはマスターの名前を確認して、少し笑った。

「それじゃあ、これから僕は山に鹿をとりに行ってくるね」

男子はそういうと、外れた扉を軽々とはめ直し。

壁に立てかけてあった鉈を手にとった。

「うちうちも行きます!」

こなゆきは桃李についていこうとした。

「ダメだよ、山の中は危険だし、くまでも出たら大変だ」

「大丈夫です。くまくらいなら、片手で倒せますから」

桃李は乾いた笑いを浮かべた。

それが、こなゆきと、桃李の、出会い。

く天真爛漫な剛力少女く（後書き）

どうもです。

次回は虚刀流最強の人間。

努力を軽んじ、才能で全てを紡ぐ。

生きること死に死ぬ希望を感じる異端。

登場予定。

く繰り返す虚刀流最強の女く（前書き）

今回登場するは、最強にして最狂にして最凶。

歴史上最強の強さを持つ、弱き強者。

名を鑢七実。

そんなこんなで悲劇惨劇無惨劇。

フェイト／カタナガタリ第6話。

始まり始まりっ

く繰り返す虚刀流最強の女く

そこは小さなアパート。

そのへんの廃墟のような安アパート。

その一室の床。

そこにはもう言うまでもないが、謎の文様が描かれている。

その部屋にはリーゼントの男が立っている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉びっ！」

・・・・・・？

「痛っ」

どうやら舌を噛んだようだ。

途中で呪文は途絶えてしまった。

「よし、もう一度だ」

その男は初めから呪文を唱え直した。

「天秤の守り手よっ！」

床の文様が青く光輝いた。

今までで一番の強風が吹き荒れ、リーゼントが崩れた。

そして、それは現れた。

「あなたが私のマスター……ですか？」

か細い声だ。

「おう！オレがお前のマスターだ」

男は髪型を整えながら言った。

「そうですか」

短くそれは応えを返した。

「美人なのに釣れねえなあ、色々話すことあるだろう？」

男は軽い口調でそれに言った。

そこそこ若いようだ。

「そうですね、でも申し訳ありませんが」

そこで一度区切りをつけ。

「私は早く死んで脱落したいんです」

それは言った。



「はああ？」

男は目元を歪ませながら言った。

自ら脱落したいなんてサーヴァントなど聞いたことがない。

驚きも当然だろう。

「なんで死にたいんだよ？オレ何か悪いことしたか？」

男は少し申し訳なさそうに聞いた。

「いいえ、あなたが原因で死にたいわけではありません」

「だったらどうして・・・？」

それは静かに応えた。

「私はもう生前において役目を果たしました」

それは続けて語った。

「弟の成長を見届けることができました」

「私は生前になんの未練もありません」

「生き返る意味も、私にはほとんどありません」

それは男に向けて言いのけた。

しかし男は言った。

「ほとんど？お前、今、ほとんど、って言ったよな？」

男はきちんと話を聞いていた。

「私にはほとんどありません」

ほとんど、ということは、少しなら未練は残っているようにも捉えられる。

男はそこに注目した。

外見とは違い、頭はキレるようだ。

「ほとんどってことは、少しなら生き返ってやりたいこと、あるんじゃないねえのか？」

男はそれに向けて言った。

それは少し強く応えた。

「唯一、未練があるなら、それは」

また区切りをつけて言った。

「今の弟と全力で勝負したら、どうなるかが気になるくらいです」

このサーヴァントは、生前に弟と真剣勝負をした。

その時は弟の知人の「奇策」という作戦により。

自らも認める敗北を味わった。

生前のそれは体が異常に脆く。

全力を1秒でも引き出せば、全身が碎け散るような激痛を伴う。

そんな生前を送ったのだ。

全力を余すことなく引き出せる今の状態は、それにとって至高だろう。

「十分な理由じゃねえか」

男は強く言った。

「弟と全力で兄弟喧嘩したい・・・これ以上なく熱い理由だぜ」  
なにかを取り違えているようだ。

「オレはこれ以上なく最高のサーヴァントを呼んだみたいだぜ」

完全になにかを勘違いしているが。

それは言った。

「面白い方ですね・・・マスター」

初めてそれは男をマスターと呼んだ。

「わかりました、健全な身体を得た私の力も試したいですし」

それはどうやらこの戦いに参加するようだ。

「おう、それはそうと、お前の真名と、クラスはなんなんだ？」

男の問いかけにそれは静かに応えた。

「虚刀流……」

それは言葉を詰まらせ、言った。

「虚刀流七代目仮当主、鑓七実です。クラスはランサーだと思います」

本来は当主でもなんでもないのだが、それは言った。

「なるほど、ランサーか……でも槍とか持ってねえみてだけど？」

ランサーとは槍を操るサーヴァント。

当然の疑問だろう。

「私の得意技は、相手を槍のごとく貫く技ですから」

平然と淡々とそれは応えた。

「な、なるほど……」

少し顔をひきつらせている男。

それは男に言った。

「マスターの名前は、なんですか？」

その質問に男は得意げに応えた。

「オレの名前は如月弦太郎だ、すべてのマスターと友達になる男だ！」

大声で勝ち名乗りでも上げるように、名乗った。

「きさらぎ、げんたろう。ですね」

それはゆっくりと言い直して、覚えた。

「おう、じゃあこれからよろしくな、七実！」

男はクラスではなく、それを生前の名前で呼んだ。

「はい、弦太郎」

それもマスターと呼ばずに、男を名前で呼んだ。

それが、七実と、弦太郎の、出会い。



く繰り返す虚刀流最強の女く（後書き）

次回登場するは。

剣においては敵を知らず。

剣聖とまで言われた堕剣士。

登場予定。

く錆びついたもう一人の最強く（前書き）

今回登場するは、虚刀流にも引けをとらぬ堕剣士。

本物の強さを有し、自身を失敗作と語るもう一つの完了。

名を錆白兵。

そんなこんなで刺激突撃時代劇。

フェイト／カタナガタリ第7話。

始まり始まりっ



く 錆びついたもう一人の最強く

そこは海が見える浜辺。

その浜辺にはもう言いたくないが謎の文様が描かれている。

そこには女性が立っている。

さらにタンクトップの野性的な風貌。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもの呪文を女性は唱える。

簡略。

「天秤の守り手よ」

文様が輝き、風が吹き、波が強く揺れた。

周りに遮蔽物がないために、それだけだ。

そしてそれは現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

現れたそれは何も喋らない。

「何か言ったらどうだ」

女性はそれに話しかけた。

「・・・・・・・・」

しかしそれは何も言わない。

「私はシグナム・L・トラペルタだ」

長々とした名前を女性は言いのけた。

「・・・・・・・・」

しかしそれはやはり何も言わない。

「長いからシグナムでいい」

女性は続けた。

「お前のマスターだ。これからよろしく」

女性は気にすることなく話しかける。

「・・・・・・・・」

ブチッ。

何かがちぎれるような音がした。

「何とか言えっ！」

女性は現れたそれを思い切り殴り飛ばした。

「あつ、済まない」

女性は素で謝った。

少しだけ悪びれているようだ。

「よい」

浜辺の砂を手で払いながら。

初めてそれは喋った。

「緊張で喋れなかった拙者にも非はある」

・・・

どうやらそれは緊張で言葉を話さなかったようだ。

「まっ、まあいい、誰にでもあることだ」

流石に女性も申し訳なく言った。

まさかサーヴァントが緊張するなんて思いはしないだろう。

それ故に女性は少し動揺した。

「それで、私の話は聞いていただろう」

「ああ、しっかりと聞いていた」

今度はそれは返事を返した。

「ならば、お前の真名とクラスを教えて欲しい」

女性はそれに聞いた。

すると。

「拙者の名は錆白兵、クラスはライダーだ」

流れるような声で応えた。

「そうか、では錆、これからよろしく頼む」

女性は握手を求めて、それに手を差し伸べた。

だが。

「その前に其方の名を教えてはくれまいか」

それは女性に問いを投げた。

しかし、今の問いの応えはすでにでている。

女性はすでに名乗っているのだから。

「私はさっき名乗っただろう」

自らが名乗った事を女性は告げた。

「そうか、だが其方に見蕩れていて聞き逃した」

見蕩れる。

それは確かにそう言った。

「シグナム・Ｌ・トラペルタだ。三度目はないぞ」

心無しか、女性は早口で名前を言い終えた。

その頬は赤く染まっているように見える。

「シグナムだな、心得た」

それは女性の名前を確認し、覚えた。

「改めて。よろしく頼むぞ、錆」

「ああ、承った」

2人は今度こそ挨拶を交わしあった。

「拙者にときめいてもらうでござる」

それはなんの脈絡もなくそんな事を言った。

「！」

すると女性の顔はもう真っ赤になった。

「い、いきなり何を言い出す！」

女性はそれに怒りを向けた。

するとそれは静かに応えた。

「気にするな、これは拙者の口癖だ」

と言った。

きょとん、とした顔になった女性は

「・・・もういい、帰るぞ」

そう言つと、踵を返して浜辺を歩き始めた。

「拙者にときめ・・・」

「うるさい！」

それが、錆と、シグナムの、出会い。

く錆びついたもう一人の最強（後書き）

ふう・・・

次が最後のサーヴァントとなります。

へ実際に最後になるかどうかはわかりませんが

次回登場するは、仙人。

誰に対しても公平で、何に対しても平等。

登場予定。

く未だ見ぬ伝説の仙人く（前書き）

今回登場するは、不老の仙人。

千差万別の容姿を持ち、誰に対しても温厚公平。

名を彼我木輪廻。

そんなこんなで過激感激時代劇。

フェイト／カタナガタリ第8話。

始まり始まりっ



く未だ見ぬ伝説の仙人く

そこはビルの屋上。

都内でも大きいほうのビルだ。

そこには1人の人間が居た。

いつものように、屋上には謎の文様が描かれている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

いつもの呪文を唱え始める。

簡略。

「天秤の守り手よ」

屋上は元から強風が吹いている。

文様から発された強風も、その強風にかき消される。

眩い光が文様を輝かせた。

そして、それはまたしても現れた。

「やあ、君がボクのマスターかい？」

軽口でそれは言った。

1人称を「ボク」としているが、声は女性の声だ。

「そうだ。俺が君のマスターだ」

対して人間は「俺」と言い、声も男性のそれだ。

「それにしても、ここは風が強いね。寒い」

現れたそれは「巫女装束」という着物を着ている。

季節的にも寒いはずはないのだが。

「そうだな、場所を変えよう」

男も同意し、2人は階段を降りていった。

場所は移り、屋上下のフロア。

その一室にて。

「うん、ここは暖かいね」

それは手を擦りながら、言った。

どうやら本当に寒かったようだ。

「なによりだ。それで話を進めてもいいか？」

男は部屋の椅子に腰をかけ、それも座るように促した。

そして2人は向かい合うように、座っている。

「なんの話かな？」

「無論、君についてだ」

相変わらず軽い口調のそれに、男は真面目に話す。

「なんでもどうぞ」

男をしっかりと見つめながら言った。

「まず、君の真名を教えてください」

男も目をそらさずにそれを見つめる。

「仙人、彼我木輪廻」

それはゆっくりと名乗りを上げた。

「ひがき、りんね、だな。ありがとう」

相変わらず、見つめ合う形で会話を続けている。

普通の人間ならば、意識的に目を逸らすものなのだが。

2人は依然として、見つめ合っている。

「他には？」

口元をにやつかせ、言う。

「君のクラスを教えてくれ」

男は静かに質問が続けている。

「キャスター。それがボクのクラスだよ」

今までのように、「多分」とか「だと思っ」ではなく。

自らが「キャスターである」と断言するようない方だ。

「なぜキャスターの座に招かれた？」

「簡単なことさ」

そこで区切りをつけ、それは続けた。

「ボクは剣も槍も弓も、扱えない」

「はたまた万物を乗りこなせるわけでもなく、狂戦士にも向かない」

「残るは暗殺者と魔術師だけど・・・ボクはそのどちらかになるハズだったんだ」

「それで、たまたま、キャスターになったわけだよ」

召喚されたそれは、生前に「戦士」として生きていたわけではない。

武器を操る技能など、皆無なのだ。

「なるほど。大体分かった」

そう言うと、男は立ち上がり、その前に立った。

「君の名前も教えて欲しいんだけどな？」

それは座ったままで言った。

「失礼。俺の名前は」

そこで区切りをつけて、続けて名乗った。

「2年Fクラス代表、坂本雄二だ」

知ってる人は知っている。

だがそれには触れない。

「2年？ Fクラス？ 代表？」

それは疑問だらけの名乗りに困惑しているようだ。

「気にしないでくれ、名前だけ覚えてもらえれば十分だ」

男はそれに手を差し出した。

「よろしく頼む、輪廻」

するとそれも立ち上がり、その手を握った。

「ああ、よろしくね。雄二」

それが、輪廻と、雄二の、出会い。

く未だ見ぬ伝説の仙人く（後書き）

ついに7体のサーヴァントが集結しました。

もう全員の紹介と名乗りは終わったので・・・

次回は教会の招集。

果たして顔見せに応じるのは誰なのか？

こつご期待。

く集結く（前書き）

前回やっと紹介が終わったので・・・

今回から本格的な話が作れそうです。

というわけで・・・

そんなこんなで見たい聞きたい時代劇？

フエイトノカタナガタリ第9話。

始まり始まりっ



く 集 結 く

場所は日本。

そして冬木という地域。

その地にて、今回の聖杯戦争は始まる。

~~~~~

冬木市の教会。

そこには聖杯戦争を取り仕切る「監督役」が存在する。

聖杯戦争のルールに反する参加者を罰する。

それが教会の仕事だ。

そして、現在、協会には4人の人間がいる。

1人はランサーのマスター・如月弦太郎。

1人はライダーのマスター・シグナム・L・トラペルタ。

1人はアサシンのマスター・間桐瞬。

どのマスターもサーヴァントを具現化させてはいない。

そして、もう一人は。

「よく来た、聖杯を望む者達よ」

黒いローブを羽織った若い男がそう言った。

この男こそが聖杯戦争を取り仕切る「監督役」である。

教会の派遣した、有能な人材なのだろう。

「君達をここに呼んだのは他でもない」

目の前の3人の人間に。

いや、「人間ではない4体の獣」も含めた3人と4体に言った。

おそらく4体の獣は他のマスターの使い魔だろう。

自らの姿を周知に晒すことを、百害と判断したのか。

姿を見せたのは3人だけだ、

「聖杯戦争は今回が初めてだ。ルールの説明を行う」

監督役の男は続けて話を進めた。

「同じモノを複数名が望み、臨んだモノが1つしか無い場合」

「他の希望者を蹴落として、手に入れる他にはない」

「つまり、君達はこの冬木の地で聖杯を求め争う」

「それこそが聖杯戦争」

そこで一度区切りをつけて。

「前置きはこんな感じだ。次に詳しいルール説明をしよう」

「君達は敵同士だ。相手を殺して、自分が生き残れ」

「勿論、サーヴァントのみを撃破し、マスターが生き延びることも可能だ」

「そういう場合、サーヴァントを失ったマスターの保護は教会で受け持つ」

「だが、サーヴァントの消滅と、マスターの死が、闘いの終ではない」

「マスターを失ったサーヴァントは別のマスターと」

「サーヴァントを失ったマスターは別のサーヴァントと」

「再契約を交わすことで、聖杯戦争に復帰することができる」

「そして最も重要なことが一つ」

もう一度区切りを付け、息を吸った。

「魔術を公にすることなかれ」

「意味は分かるだろう？魔術を周知にしてはならないということだ」

「秘密裏に行われるのがこの聖杯戦争」

「人目もはばからずに、堂々と魔術を使用するならば」

「教会よりそれ相応の対処をされることになる」

「最悪の場合、強制失格となる」

「そうならば、監督役の権限において」

「すべてのマスターに失格者の排除を命じる」

ここで一度話を終えた。

男は呼吸を整え。

「何か質問は？」

と言った。

するとシグナムが手を挙げた。

「どうぞ」

男が発言許可を出す。

「マスター同士で同盟を組むのは、反則になりえるのか？」

同盟。

一時的に手を組み、難敵に対処する。

戦いにおいてこの戦術を駆使せぬ者はいないだろう。

「問題ない、同盟をくもすが、裏切って殺そうが、それは自由だ」

「了解した」

そして、次に弦太郎が手を挙げた。

「どうぞ」

「必ず戦わなきゃいけないのか？」

「どういう意味だ？」

「話し合いで勝敗をつけてもいいのかって事」

話し合い。

もう少し戦術的に言うなら「交渉」

相手との会話により、勝敗を決する。

稀有な戦術だが、効果的でもある。

「問題ない。己の格の違いを認めたならば、辞退することも可能だ」

「分かった」

他に手を挙げる者はいなかった。

「宜しい。ではこれにて説明会を終えましょう」

続けて。

「現時点から、聖杯戦争を開始する。存分にその力を振るうがいい」

男は言い残し、去ろうとした。

「待て」

シグナムが声をかけた。

「何かな？」

「名を」

監督役の男は名乗っていない。

名前を聞きたがるのは自然なことだろう。

「私としたことが、失礼」

そして静かに名乗った。

「第1次聖杯戦争監督役、岬越寺秋雨だ」

読み仮名にしてみよう。

岬越寺秋雨「こうえつじ、あきさめ。

完全に日本人のようだ。

「それでは失礼する」

男は教会の奥に消えた。

4体の使い魔は飛び去っていった。

残ったのは3人のマスター。

「それでは挨拶をさせてもらおう」

一番に口を開いたのは、シグナムだった。

「ライダーのマスター、シグナム・L・トラペルタだ」

名乗りを終え、2人のマスターに言う。

「長いからシグナムでいい、敵同士だが、よろしく頼む」

お手本のような挨拶を終えたシグナムは帰ろうとしたが。

「俺はランサーのマスター、如月弦太郎だ！ヨロシク！」

弦太郎は、協会全体に響きわたるほどの大声で自己紹介をした。

「私はアサシンのマスター。間桐瞬です・・・よろしくお願いします」

静かだが、瞬も自己紹介を終えた。

「弦太郎と瞬だな。お互いに死力を尽くそう」

そう言い終えたシグナムは今度こそ教会を後にした。

残るは2人。

すでに聖杯戦争は開始している。

協会を1歩出れば、即座に攻撃されてもおかしくない。

「瞬」

弦太郎が瞬の名を呼んだ。

「はっ、はい！」

いきなり声をかけられてびっくりしたのか、吃逆のような応答をした。

「これからヨロシクな」

弦太郎は仮にも敵に手を差し伸べた。

すべてのマスターと友達になるというのはハッターではないようだ。

「あつ、はい。よろしくお願いします」

瞬も弦太郎の手を握り、握手を交わした。

開始早々に友好的関係を築くのは、良策だろう。

「それじゃ、またな！」

そう言い残し、弦太郎も教会を後にした。

そして、残った瞬はというと。

「始まったんだ・・・」

自分の手を自分で握り、そう言った。

「眠い・・・」

瞬は教会の椅子に腰掛、近くにあつた毛布で体を包んだ。

この協会が宇練銀閣の召喚に使われた教会であることは。

本人達と協会関係者しか知らない。

聖杯戦争。

その起源である戦争が今、始まった。

く集結く（後書き）

はい。

次回あたりから個別の参加状況を書いていこうと思います。

バトルまであと3話くらいでしょうか・・・

適当な目安ですが、次回にご期待下さい。

く虚刀の自慢の宝具く（前書き）

いやはやこの小説も早くも10話目ですね・・・

皆さんの応援のおかげで勇気づけられます。

そんなこんなで無対絶対時代劇。

フェイト／カタナガタリ第10話。

始まり始まりっ

く虚刀の自慢の宝具く

そこは絢爛豪華な造りのお屋敷。

その屋敷内には1人の人間と1人のサーヴァントがいた。

セイバーととがめだ。

その2人は同じ部屋にいた。

とがめの部屋に。

「ねえ、貴方本当に強いのか？」

とがめが七花に向けて言った。

「いきなりだな・・・まあ強い方だと思うぜ」

七花は少しだけ自慢げに言った。

生前の戦績を考えても、強い方に入るであろう実力だ。

「でも、セイバーが剣を持たないなんてなんか不自然よね」

ここでセイバーのクラスについて説明しよう。

セイバーのクラスに招かれる条件は一つ。

「平常軌を逸する剣技を身に付けた者」であること。

つまり剣に秀でていることが何よりの条件なのだ。

「おいおい、とがめ。お前は何か勘違いしてんじゃないか？」

七花は微妙に笑いながら言った。

「ん？何がよ？」

とがめは自覚がないために、七花に聞いた。

「刀を持たない、じゃなくて。俺自身が刀なんだよ」

七花は続けて。

「いわば俺がセイバーなんじゃなくて、セイバーと言えるのは俺だけ。と言ってもいいかもな」

と言った。

「大した自信ね」

親しげな会話を続ける2人。

もう完全に打ち解けているようだ。

「まあ、闘ってみるまで分からないけどな」

「そりゃそうよね」

部屋での七花は床に肘をつけて寝ている。

とがめは七花と向かい合うように、同じ格好をしている。

「それにしても、貴方のその格好はどうにかならないのかしら？」

とがめは顔が20cm程しか離れていない七花に言う。

「格好って？」

「上半身裸のその格好よ」

とがめの言うとおり。

七花の現在の格好は上半身裸・下は袴を履いている。

そんな格好だ。

「ああ・・・でも別に不都合もないだろ？」

真顔でそう言う七花。

「正直、私の目のやり場に困るのだけれど」

「・・・・・・？」

七花は生前も現在も鈍感である。

女性の気苦労など、知る由もない。

「まあ、いいわ」

とがめはムクツ、と起き上がり、あぐらをかく形になった。

「それで、貴方は何個の宝具を所有してるの？」

宝具。

それはサーヴァントの生前の異名や伝説から具現化された英雄の証。

それを多く所有するほど、生き残る可能性も高い。

そう言える程に宝具の重要性は高い。

「宝具・・・ねえ・・・」

七花は明後日の方向を向いてそう言った。

「まさか一つも持って無い訳じゃないでしょうね？」

少し苦笑いしながらとがめは聞いた。

「まさか。自慢の宝具が3つ程あるぜ」

3つも宝具を有するサーヴァントなど滅多にいない。

かの英雄王なら話は別だが。

それでも3つの宝具とは、立派な英雄の証だろう。

「3つも！？凄くないの！」

さつきと打って変わり、目をキラキラさせているとがめ。

「でも、その内の1つはちょっと理由があって使えないんだよ」

使えない宝具。

勿論そういう類の宝具もある。

呪いや制約により、宝具の使用制限のかかる場合もある。

「ま、まあそれでも2つもあれば十分よ」

とがめは少しテンションを下げたが、上機嫌だ。

「そうか？とがめが良いなら、俺も嬉しいよ」

七花はそう言うと、ゴロン、と姿勢を崩して寝転んだ。

「あ、ちよつと。1つ位今見せてくれてもいいんじゃないの？」

宝具とはそんな無闇やたらと使っていないものではないが。

今のとがめはそんな事微塵も考えていないようだ。

「え・・・今？」

「今」

力強く言ったとがめに、七花は根負けし、渋々立ち上がった。

そして、庭に移動した七花とがめ。

「一度だけだぞ」

「うん。貴方の自慢の宝具、見せて頂戴」

そして七花は庭の中心に移動した。

そこで変わった構えを取った。

いや、構えていないのだ。

それは七花が生前に一度も使うことのなかった構え。

虚刀流、零の構え・無花果。

「身体は剣で出来ている・心は鋼で作られる・技は鞘で磨かれる」

そんな言葉か呪文かを、七花は言った。

「とまあ、こんな感じの宝具だ」

七花はまだ何もしてないのに、そんな事を言った。

否、すでに何かをしていたのだ。

なぜなら・・・

「・・・いつの間に後ろに来たのかしら？」

七花が今居るのは、とがめの真後ろだ。

庭の中心からとがめの背後まで、約30m。

どんなに早く走ろうと、目には止まるはずだ。

ちえりお

「これが俺の1の宝具、ハ疾駆する白髪的朋友だ」

要するに、ただ速く走る宝具。

ただ速く動くための宝具だ。

だが、生身での剣技を扱う虚刀流にとってはこれ以上ないアドバンテージだろう。

「へえ・・・地味だけど、なかなか良い宝具じゃないの」

「せっかく見せたのに地味ってひどくないか？」

そんなやり取りを、別のサーヴァントがしっかり見ていた。

屋根の上から。

「庭で宝具を見せるなんて、迂闊な事をするものだよ、七花君」

その声は女性のものだ。

「まあ、ボクは知るだけで直接闘いはしないのだろうけれどね」

そう言い残し、そのサーヴァントは去った。

ゝ虚刀の自慢の宝具ゝ（後書き）

そんなに激しいバトルはまだ予定がないのですが・・・

はじめのバトルはランサーを出そうと考えています。

次回にご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4219z/>

刀語 × Fate ~ 現代に集う英雄たち ~

2011年12月25日21時49分発行